

「コロナ禍の中でのオリンピック」に代表されるこの国の政治は、今大きな岐路に立たされている。世界中にコロナ・ウイルスが蔓延する現状は偶然ではない。経済成長を旗印に、これまで地球規模で自然を破壊してきた結果、たまたまコウモリのウイルスがヒトに感染したに過ぎない。過去 20 年間の世界中の自然破壊と感染症の発生に強い相関があることが、最新の研究で明らかになっている。50 年前の 1970 年、ローマ・クラブが発した「成長の限界」は今、現実のものとなりつつある。未来世代の為に何が大切かを考えなければならない。

### 経済成長の象徴:原発と遺伝子組換え

1970 年はこの国にとって大きな節目だった。大阪万博会場に初めて若狭湾の原発（敦賀 1 号、美浜 1 号）から電気が送られ、政府もマスコミも沸いた。「原子力の平和利用はこれからの経済を支える」という主張だった。経済成長の真ただ中、電気は暮らしに欠かせないものとなり、石油・石炭による火力発電も大幅に増えた。「原発事故が起きたらどうする」という反対派の声はかき消され、電力会社や国は「事故は百万年に一回しか起きない。万一起きても五重の壁に守られて放射能は外に出ない」「廃棄物はそのうち何とかなる」と豪語した。それから 50 年、すべては嘘だった。チェルノブイリとフクシマがそれを実証した。炭酸ガス増加による地球温暖化に否定的な人も少なくない。だが近年の地球規模の自然災害の多発が、ようやく「脱炭素」に人々を目覚めさせた。

暮らしが豊かになった 1990 年代、「経済成長で地球の人口が増え、食糧難になる。農薬の利用も増える。それを解決するのが遺伝子組換え」という主張が、アメリカを中心に広がった。これもまた全て嘘だった。遺伝子組換え作物の栽培で、除草剤や枯葉剤が食料を汚染し、癌や白血病、児童の発達障害や自閉症の増加が今、大きな問題になっている。日本は、世界最大の遺伝子組換え作物輸入国だ。アメリカ産牛肉には、IGF-1 という成長ホルモンが含まれる。これは女性に乳癌、男性に前立腺癌をもたらす。この牛に使われている遺伝子組換え成長ホルモンが原因だ。

「豊かな暮らし」の裏側には、「経済成長」に伴う自然環境とヒトの命の破壊という落とし穴があった。

### 世界は変わりつつある

コロナ禍の中、今ようやく世界の人々はその真実に目を開き、「未来世代の為に今何をなすべきか」に関心が高まっている。食の安全に対する関心は、その象徴である。遺伝子組換え大豆の大規模栽培で、大きな被害を受けたブラジルから始まった「食のオーガニック」運動は、今アメリカでも急増している。韓国の首都ソウル市は、今年の 1 月から市内の小中高（1,300 校余）の学校給食を全てオーガニックで無償化した。それを支えているのは、ソウル近郊の中小農家である。日本国内でも「学校給食をオーガニックに」という運動が広がり始めた。EU は 2030 年までに農業の 25% をオーガニック化する計画だ。食の安全は、単にヒトの健康の為だけではなく、環境保護や温暖化防止と言った地球規模の未来の安全につながっている。

だが日本の現状はどうだろう。脱炭素の為に称して、老朽原発の再稼働や新型原発の開発まで考えている。政府の「脱炭素の為にグリーン戦略」は世界の流れに逆行し、ゲノム編集や IT 技術を使った大規模・企業農業を増やして、農産物輸出による経済成長を目指している。2017 年には農薬の安全基準を大幅に引き上げ、アメリカからの農産物輸入を増やした。コロナ禍の中、世界のグローバル企業は利益を上げ、過去最大の内部留保を確保している。何が未来の為に、今こそ真剣に考えるべき時だ。(2021 年 7 月 29 日 河田)